

仏心と葬弁儀

ーその8ー

再起を賭けて葬儀社を開業

こうして飛田夫婦は葬儀社の開業を決意しました。しかし、サラリーマンの身で、開業の資金などほとんどありません。「さて、どうしよう」。思い悩む飛田に、芳栄は明るく告げました。「この家売ってお金を作ればいいじゃない」。飛田が結婚と同時に購入した一軒家を売り払おうというのです。妻の予想外の同意、さらには大胆ともいえる提案に飛田は喜びました。しかし、「子どもを失った上に、自分たちの家まで売ってしまったのは、本当に丸裸同然だ」。まさに背水の陣だったのです。

芳栄は述懐します。「でも、子どものいなくなつたあの家においても、空しく寂しいばかりでした。あの子の物を手にしては嘆くだけの毎日でしたから。だから、売り払うことにそれほど未練はなかったんです。それに飛田は一度こうと決めたなら、最後までやり抜く人だと信じていましたから……」。

「よし、決まった。たとえ失敗したって、運転免許は持っているんだから、運転手にでもなればいいさ」。そう決心した飛田は、再起へ向けた開業の準備に取りかかりました。不動産業者に家を売り払い、自分たち夫婦は

治水町に借家を求めてスタートを切ったのでした。

独学で仕事を学ぶ毎日

しかし、再起への道のりは予想以上に厳しいものでした。資金で購入したトラックに乗り、仕事を求めて走り回る日々が続きました。また、葬儀の仕事の内容にしても、誰も教えてくれませんので、札幌などへ足を運び、見ず知らずの人の葬儀を見学するなどして独学での勉強を続けました。

ある日、漁業組合からお祝いの花を朝五時までに届けてほしいという注文が入りました。飛田は徹夜で花を作り、夜明け間際になってようやく作り上げたこともありました。

また、葬儀会場にはくじら幕を張り巡らしますが、その長さは会場によつて異なるため、一般の業者はさまざまな長さの幕を用意しておかなければなりません。しかし、飛田には何枚も幕を買う余裕などないため、芳栄がその後、新たに産まれた赤ん坊を背負いながらミシンを踏み、ちようどよい長さになるように夜なべ仕事で仕上げるといった日々が五年あまりも続いたのでした。

・つづく・

■ 次回の掲載は四月十八日(土)を予定しております。